

「俺が彼女を買い取る」

聞くものを無条件に平伏させる低音が、品位を持ってそう告げる。

部屋にいるガタイがよくガラの悪い男たちが驚いたのが空気で分かった。声の主はソファに座ったまま、不愉快そうに眉間に皺を刻んだ。

——どうしてこの人がここに……？

部屋の空気は重く、わたしは何も言えず黙って彼を見つめた。

細いフレームの眼鏡が切れ長の目の冷たさを際立たせ、自然に流れるオーラルバックの黒髪が知的さと禁欲さを醸し出している。きっちりと着こなしたスーツは、ブランドに疎いわたしでも質がいいものだと一目で分かる一級品。周りにいる、いかにも裏稼業の人間です、といった風情の強面たちとは全く違う生き物に見えた。

「ちょうど夜の相手が欲しかったんだ。店の女が苦手なのは知ってるだろ？

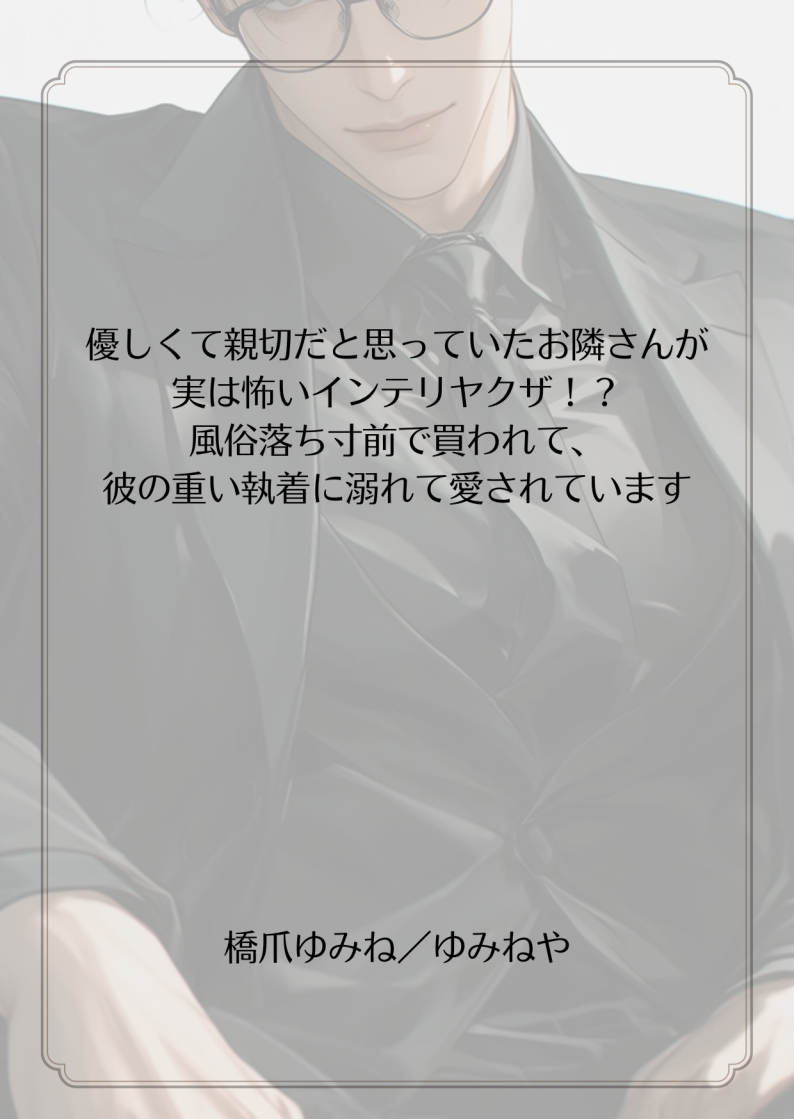
下心がある女は嫌いなんだ」

「で、でも……」

わたしをここに連れてきた男が口を挟んだ瞬間、鋭い視線がその人を射抜いた。

「誰に口を利いてる？」

荒っぽさの欠片もない声で一瞬で空間を支配してしまう氷のような男に、わたしはただただ困惑していた。



優しくて親切だと思っていたお隣さんが  
実は怖いインテリヤクザ！？  
風俗落ち寸前で買われて、  
彼の重い執着に溺れて愛されています

橋爪ゆみね／ゆみねや

——重い……調子に乗って買い過ぎちゃった。

暗くなり始めた道をのろのろと行く。風はひんやりとされていて、もう夜の雰囲気を感じている。

週の中で一番疲れが出る水曜日。肩にかけたお気に入りのエコバッグも悲鳴をあげている。さらにもう片手には通勤用の鞆とトイレトペーパーがある。

——買ってる時はいけると思っちゃったんだもん……っ！

街灯がぼつぼつとあるだけの静かな道をよたよたと抜けて、古いマンションに辿り着く。エントランスの安っぽい明かりに、ほっと息を吐いた。

「重かったあ……」

エレベーターのボタンを押して、肩から力を抜く。三階を示す部分がオレンジに点滅するのをぼんやりと眺めた。建物自体が古いせいか、エレベータ

ーが降りてくるのにも時間がかかる。

——明日と明後日頑張ったらお休み。なにしようかなあ。

高校の時に両親を亡くし、頼れる親戚もおらず早々に独り立ち。苦しいながらも行政やいろんな制度と人に助けられて生きてきて、もう20代も半ば。仲のいい友達とは彼氏や家族と過ごすことが多くなってきた、遊びの誘いは減り、こっちからも誘いにくい。そんな年齢になっていた。

好きな気持ちは変わらないのにゆっくりと疎遠になっていくことを寂しいと思うながらも、それを割り切ることができるようになってきた。

——彼氏……というか、気持ちの支え？ 生活のハリ？ 生き甲斐？ になるような人がいてくれたらと思うけど……難しいよね。心細さに人を付き合わせるのってどうなの、って感じだし。それに、推しならいるし。一般人だけど……。

エレベーターの扉が開く。中には背の高いスーツの男が一人居た。

「……おや、こんばんは。お帰りなさい、ですかね」

「こんばんは、榊原さん。ただいま……です」

お隣に住む推し、こと、榊原さんだ。今日も今日とて顔がいい。やり過ぎない程度に流した黒髪も、フレームが細い眼鏡も、ジャケットから覗く黒いシャツも、見事に全部様になっている。仕事終わりの疲れ目には眩しいくらいに格好いい。

扉を開けて待っていてくれる彼に慌ててエレベーターに乗り込むと、そのまま扉が閉まった。

「あ、れ？ 降りるんじゃないかなかったですか？」

迷うことなく三階を示すボタンを押した長い指と、端正な顔を交互に見る。榊原さんは口角を控えめに上げて微笑み、わたしの肩から滑り落ちそうにな

っているエコバッグを自然な仕草で取り上げた。重みで軋んでいた肩がすうっと楽になって吐息がこぼれる。

「こんな大荷物 of 女性を黙って見送れませんよ」

そう言ってトイレトパーパーも彼の手に渡る。千切れそうだった手に血が通って熱くなった。

「あ、ありがとう、ございます」

「どういたしまして。仕事終わりに買い物をするのも大変ですね」

「今日はつい調子に乗っちゃって……休み休み帰ってきたから、時間掛かったかもしれません」

仕事終わりでヨレヨレのわたしと違って、榊原さんは綺麗だ。なんという

か、埃一つ許さない、という感じ。

——きっとお部屋も綺麗なんだろうな。生活感なさそう。

勝手に想像して小さく笑うと、榊原さんが優しく目に細めた。心臓がどきりと甘く高鳴って、目を逸らす。ただのお隣さん……たまにこうして居合わせたときにおしゃべりをするだけの相手にときめくなんて、いくらなんでも見境がなさすぎる。

「部屋まで持つて行きますよ。鍵、出せますか？」

いつの間にか到着したエレベーターの扉を開けていてくれる彼に、またどきどきする。

——でもこんな格好いい人に優しくされて、ときめかない方が無理じゃない？

心の中で言い訳をして、自分を落ち着かせる。そうよ、みんな榊原さんに



優しくされたら、ころっと推しちゃうに決まってる。

「ありがとうございます！ 本当に助かりました」

「いえいえ。またいつでも頼ってください。お隣さん、なんですから」

「そんなわけには……」

「僕が頼って欲しいんですよ。白石さんに」

ひえ。

声にならない悲鳴は飲み込めたけど、肝心の返事が出てこない。頬にじわじわと熱が集まってくる感覚ばかりが鮮明で、気の利いたことなんて言えやしない。

ポカンとした顔で自分を見上げる女が面白かったらしい。榊原さんは満足そうに笑った。

「ではこれで。しっかり戸締りしてくださいね」

「あ、待って……っ！」

帰ろうとする彼を咄嗟に引き留めた。今度は榊原さんが不思議そうな顔をしている。

「あ……えっと。その、……いつてらっしゃい、です」

この言葉が正しいのかは分からない。でもエレベーターで降りてきていたということは、きっと今からどこかに行くのだろう。

ぎこちなく言ったお返しの言葉に、レンズの向こうにある目がわずかに見開かれた。驚きを露わにした表情に不安になる。

「……違いました？」

「いえ……」

気まずそうに眼鏡の位置を直した時、

「……いってきます」

低い声でそう告げて、榊原さんは去っていった。

「はぁぁ……」

閉まった扉に向かって大きく息を吐く。誰かに「いつてらっしゃい」を言うのは何年ぶりだろう。高校の時に両親を亡くしてからは数えるほどしか言っていない気がする。胸の内側が暖かく、くすぐりたい。

「……格好よくて、どきどきしちゃった。イケメンの威力ってすごい」

胸が高鳴る理由は榊原さんがあまりに整った顔をしているからだと思う。優しいだけの人にはこんなときめいたりしない。わたしは自分が思っている以上に面食いなのかも。

——異性として好き、というわけじゃないもんね。

“推し”であって、“好きな人”ではないのだ。積極的に関わっていいとは思わないが、見かけた時には元氣が出る、そんな存在。一般人を勝手に推していることに後ろめたさはあるけれど、本人を含め他人にバレなければセーフ……だと思いたい。

「こんな古ーいマンションに引っ越してきてくれてありがとうございます……って言ったら、大家さんに悪いか」

謝罪のつもりで2階に住んでいる大家さんの部屋の方角に向かって軽く頭を下げる。

あんなふうには浮かっていたから、バチが当たったのかもしれない。  
次の日、わたしは人生の一番の岐路に立たされることになる。

「……あれ？」

定時で帰宅すると、部屋の前に見知らぬ男が二人立っていた。

一人はエンジ色の、もう一人はよく分からない柄もののスーツを着ている。髪色は明るく、どう見てもサラリーマンではない。

——ヤクザ……にしか見えないけど……そんなわけないよね？ 部屋間違えてるのかな。

間違えてるにしても怖すぎる。大体、なんて言って退いてもらったらいいのか。エレベーターから降りたところで動けずにいると、エンジ色のスーツの方が歩み寄ってきた。ゆっくりとした足取りでまっすぐこちらに向かってくる。

「おかえり、白石小春さん。遅くまでお疲れさん、ちょっと部屋で話そうや」

「えっ、やだ、なんですか……っ！」

肩を強く抱かれて足がすくんだ。抜けそうになる腰を立てて抵抗しても何の意味もなく、引きずられるようにして自宅のドア前に連れて行かれる。いつの間にか奪われた鞆から鍵を取り出して、二人の男はわたしを部屋に押し込んだ。恐怖で膝が震える。靴を履いたまま床に座り込むと、男は目の前に一枚の書類を突き出した。

「この名前、見覚えあるよな？」

借用書。そこに記されているのは学生時代に一番仲が良かった友人の名前だった。そしてわたしはこの書類自体に見覚えがある。

——これ、前にお願ひされた……。

数ヶ月前、五年ぶりに連絡があつて彼女とお茶をした。その時に頼まれて

サインしたのだ。婚約者が暴力を振るってくるから逃げたい、そのための費用がないから借金をしなくてはならない、名前だけでいいから貸してくれないか、と。

「あるよな？ コイツ逃げたんだわ。連絡もつかねえ。返すもんも返さないでどこ行ったんだか」

「そんな……」

逃げた、ということは婚約者からも無事に逃げられたのだろうか。久しぶりに会った彼女はずいぶん痩せていたし、くたびれていた。毛玉のついた服で泣きながら「小春しか頼れないの」と震えていた姿は、今思い出しても胸が痛くなる。

「俺らとしても、アンタにこんなこと言いたかないんだが……こっちも商売



なんでね」

「保証人のお前に返してもらわねえと、俺らが叱られるんだわ」

威圧感のある声と怒った顔に何も言えなくなる。腰は抜けたままで身動きもとれない。

方法はともかく彼らが言っていることはもつともだし、サインしてしまった以上わたしにも責任がある。それに借りた額は決して少額ではなかったけど、貯金を切り崩せば何とか返せる額だった。大切な友人のためだと思えば痛くもない。

「キッチリもらって来いって、上に言われてんだよ。できるよな？」

覚悟は決めたのに、声が出ない。許容量を超えた恐怖に身体がついてこないみたいだ。なんとか頷いて見せると、男はニタリと笑った。

「聞き分けがよくて助かるなあ！　じゃあ——」

——え？

告げられた額は当初聞いていたものとはかけ離れていた。

「う、うそ、そんなわけ……」

「俺らが嘘吐くわけねえだろ！」

バン！　と壁を叩く音が響いて心臓が痛いほど縮み上がった。壁にかかっていた小さな時計が足の上に落ちた。痛みが感覚をより鮮明にする。

怖い、怖い、怖い。今までぼんやりとしか理解できていなかった恐怖の輪郭が、みるみるうちに鮮明になって襲ってくる。ガタガタと身体が震えて息ができない。大人しくなったわたしに、二人はドスの効いた声で畳み掛ける。

「利子があるに決まってるんだろ」

「加えて延滞料、逃亡損害、迷惑料もかかってんだ。この程度で済んでありがたいと思えよ」

とても一括で返済できる額ではない。貯金をすべてはたいても足りない。決して多くはない給料を一体何年分積んだら返せるのかさえ、今のわたしには分からなかった。視界が暗くなって、床に座っているはずなのに、その床がぐにやぐにやと曲がっている感じがする。

男がガラガラした音で笑って、わたしの肩をさも優しくに叩いた。

「うちの系列店で働いて返しゃいいんだから、泣くなよ」

「そうそう、頑張り次第ですぐ返せるって」

「系列……店……？」

「会社員の給料じゃ無理でも、風俗なら返せんだろ」

風俗。その単語を聞いて背中が冷えた。

「スタイルも悪くないし、これなら半年も頑張ったらイケるんじゃないか？」

「本人の頑張り次第ではもっと早いかなあ」

「半年……」

「利子なんて膨れるばかりなんだ。一日でも早く返したいだろ？ 会社員

の給料でチマチマ返してたら一生無理だぞ」

どんな世界なのかも分からない場所で半年。果たして本当にそんな短期間で借金を返せるだけのお金が稼げるのかも、分からない。恐怖で萎縮した頭をフル回転させても、彼らがわたしを丸め込もうとしていることは明らかだった。

——でも、このままだと一生借金漬け……。それにここでわたしが返さなかったら暴力男からやっと逃げられたあの子が、今度はヤクザに捕まっちゃう。それだけは避けなくちゃ。

「それにさ、白石さん」

作り上げられた同情的な声に顔を上げると、男が口角を上げて下衆に笑った。

「友達に借金押し付けて男と逃げてった女だぜ？　そんな奴のために一生借金に縛られるなんて馬鹿馬鹿しいだろ？」

「男と……？」

「ブランドものの鞆ぶら下げて、派手な男と一緒に金借りに来たんだよ。見たところ相当入れ込んでたんだ、借金も男のためだろうな。ウチ以外からも

借りてるらしい。近いうちに捕まるだろ」

嘘、と声にならない声が落ちた。

しゃがれた声が冷たい現実を突きつける。目の前の景色が揺れて、聞こえる音もどんどん遠くなっていく気がした。

「簡単に騙せそうなヤツに押し付けたんだよ。アイツはな、ハナから自分で返すつもりなんかなかった。最初からアンタに背負わせるつもりでヤクザから金借りたんだ」

騙されてた。ううん、違う。最初から友達じゃなかったんだ。

全身から力が抜けて、内臓が重く感じる。指先は冷たく、感覚がなかった。

「——とりあえず、店行こっか」

奇妙に優しい声に頷くことも、首を振ることもできなかった。



幸か不幸か、わたしには身寄りと呼べるものがない。恋人もないし、友人たちも今となっては疎遠。わたし一人が黙って頑張れば誰にも気づかれることなく、事を終えられる。心配させることも、巻き込むこともない。それに。

——もうなんか、どうでもいいか……。

黒く蝕まれた心が、身体を売ることに肯定的になっていく。

——嬉しかったのにな。わたししかないって、そう言われたのが嬉しくて、舞い上がっちゃった。そんなわけないのに。

頼ってもらえたことが嬉しかった。誰かに必要とされてると思って、浮か

れてしまった。本気で助けられると思いがってしまった。

後悔なのか反省なのか、鈍い頭の中はそれを繰り返してばかり。

静かにこぼれた涙が頬を伝った。整合性なんて考えていないネオンが、走るスピードで流れていく。わたしを乗せた車は、ギラギラと下品に煌めく繁華街を走っていた。



たちの悪い冗談だと思った。

実は全部夢で、目が覚めたらいつものさえない一日が始まる。華はないが危険もない、ごく普通の会社員の生活。

けれど何度瞬きをしても目の前の景色は変わらない。

タバコの匂いが染みついた壁、散らかった机。どことなく俗っぽく感じるのはここが風俗店の事務所だという、偏見にも似た思いがあるからだろうか。そして安っぽいソファに座る男は紛れもなく“推しのお隣さん”である。  
さかきばら  
榊原さん、だ。

「だから、彼女は俺が買い取る。同じことを二度も言わせるな」  
「すみません……！」

苛立ちを孕んだ声に肩がすくんだ。慌てて頭を下げた男たち——エンジ色

とよく分からない柄のスーツの二人も、よく見ると震えている。さっきはそんなに怖かったのに、今はそうは思わない。彼らに対峙する眼鏡の男の圧力に、情緒がおかしくなってしまったのかもしれない。

「……分かったならいいんだ。請求書は事務所に回せ。彼女と話がある」  
「は、はい！」

途端に柔らかくなる声色も恐ろしい。感情のスイッチを自在に操れる人間はどこかおかしいと相場が決まっている。

男たちは逃げるように出て行った。狭い個室で、わたしは彼と二人きりになってしまった。榎原さんはため息を吐いて視線を流す。

——ど、どうしよう……。

どこを見たらいいのかさえ分からず、今閉まったばかりのドアに視線を固定する。ぎしりとソファが軋む音がして、肩が大きく跳ねた。

「驚かせてしまって、すみません。まさかあなたがこんな所にいるとは思わず」

「い、いえそれは……」

こっちのセリフです！　とは言えるはずもなく、曖昧に頭を下げた。

「今話した通り、あなたの借金は俺が返しました。なんの心配もいりません」

微笑さえ浮かべる彼に、何も言えない。緊張で喉が窄まって、しゃべることはおろか呼吸の仕方さえ忘れてしまった。

わたしが知っている榊原さんは、半年くらい前にマンションの隣室に引っ越してきた男の人だ。

古い建物に似合わない身なりの良さが気になったけど、きっと職場が近い

んだろうな、と思っていた。

——本当に、同じ人？

信じられない思いで彼を見ると、榊原さんはいつもの——マンションで会った時と変わらない優しい目で、わたしを見つめていた。わずかに緊張が解けて、一気に疑問が押し寄せる。

どうして榊原さんがわたしの借金を？ いや、そもそもわたしの、ではなくて友達の、なんだけど……でもそれにしたって榊原さんが返す理由なんてひとつもない。なにより、あなたはいったい何者なんですか……!?

聞きたいことは山ほどあるのに、口から出たのは情けなく震えた声だった。「ど、どうしてそんなことを……」

榊原さんは、ふ、と小さく笑った。楽しげな目は獲物をどういたぶるか吟味しているようにも見える。しかし声に温かみはなく、わざと濃厚そうな声

を発している気がした。

「どうして、ですか。今は何を言っても納得はできないでしょう。ですが……そうですね」

言葉を切って長い足を組んだ。磨き上げられた靴からは、彼の神経質さが垣間見える。

「実は不眠に悩んでいまして。眠るための手伝いをしてほしいんです」  
「手伝い……?」

「ええ。と言っても、べつに専門的なことを求めたりはしません。葉なんかはもうとつくに試していますから」

突然のことにうまく頭がついてこない。むしろ思ってもみなかった言葉に

一層混乱する。

不眠？ 手伝い？ 眠るための手伝いつて、何……？

単語がぐるぐると頭の中で回るだけで答えは出ない。よっぽど間抜けな顔をしていたのか、榊原さんは薄く目を細めた。

「毎日20時にお宅にお邪魔します。あなたはそれを受け入れるだけでいいのです」

どういうことですか、と問う間もなく澱みなく次の言葉が流れ込んでくる。主導権は完全に向こうにあって、わたしはただ流されていることしか許されない。

「あなたは俺に買われて、風俗で働かずに済んだ。汚いオヤジに好きにされるより、よっぽど良いと思いませんか？」

「……でも……」

「表向きは……そうですね、俺の女。部下にはヤンチャな奴も多いですが、こう言っておけば誰もあなたに手出しはしない。俺も昼間はあなたに一切関わりません。夜だけ俺に付き合ってくれればいい」

「夜だけ……」

「夜は家にいることが多いですね？　つまり今の生活から大きく外れることなく、理不尽に背負ってしまった借金からも逃れられる。風俗で働く必要もない。断る理由……あります？」

「え、つと……」

すらすらと流れ出た言葉を咀嚼する間もなく問われ、目が泳ぐ。表情を変えずに淡々と告げられると、なんだか彼が正しい気がしてくる。実際、彼のおかげで借金も風俗店で働くことも免れたのだ。助けてもらった以上、わたしだけ何も差し出さないのは不公平な気がした。

——夜の相手ってそういうこと。昼間は関わってこないって言うし……夜  
ちよこっとお手伝い？ をしたらいいってことだもん……ね？

考えれば考えるほど、わたしが得をしている気がする。本当にいいのだろ  
うか。榊原さんを見ると、レンズの向こうにある鋭い目がゆっくりと瞬いた。

「ない……です？……」

「では契約成立ということだ」

「……あ、はい。ありがとうございます、よろしくお願いします」

薄く整った唇がどこか満足そうな弧を描いた。ゾツとするほど綺麗な顔。  
底知れない雰囲気気圧されて身動きが取れずにいると、榊原さんはわたし  
の正面に立った。

——わ……マンションで会う時より、おつきく感じる……。

頭ひとつ分以上大きい彼は、普段会う時よりもテーブル越しに見ていた時



よりも随分大柄に見える。スーツに収められた胸板は分厚く、それが威圧感を増す手助けをしていた。

「……へ」

顎に指が絡んで上を向かされる。怖いほど整った顔が間近に來た、と思った次の瞬間には唇を塞がれていた。

「ッんん、ふ……っう、んう」

油断した唇を舌で割られて、そのまま唾内を舐られる。検査のように隅々にまで厚い舌が這って粘膜が絡んだ。ぬぢゅ、ぢゅる、と唾液の音が響いて今起こっていることが現実だということを示してくる。齒をなぞった後は上顎を、その後は舌をねっとりと絡め取られる。

——…っ！ な、に……

舌の根がじんと疼いて背筋が熱くなる。初めての感覚に驚く暇もなく貪られて、体温が上がっていくのを感じた。

「は……っあ、あ……ん、ふあ……」

「——…ン、大丈夫そうですね」

いったい何が大丈夫なのか。唾液の糸を器用に舌先で切って眼鏡の位置を正す彼を、肩で息をしながら見上げる。

流れる仕草で耳元に唇が触れて、わたしは自分が耳まで熱くなっていることを知った。

「行きましようか、車を回します」

面白がる声は低く、穏やかな響きの中に有無を言わせない圧がある。「はい……」と小さく情けない声と一緒に頷くことしかできなかった。

——もしかして、手伝いつて、そういう……？

この時はまだ自分があんな目に遭うことも、どんな想いを抱くことになるのかも知らなかった。



向かった先はわたしの家だった。押し入られた後そのまま連れ出されたので、玄関は荒れたまま。あの時はいっぱいいっぱい気が付かなかったが、靴箱の上の一輪挿しは倒れて水浸しになっているし、揃えてあったサンダルは踏まれて泥がついていた。落ちた時計は秒針が外れてしまっている。改めて見るとまるで泥棒に入られた家のような有様だ。

「……これは」

「あ……ごめんなさい、散らかってて……」

息を飲んだ榊原さんの顔が見られない。散らかっていて恥ずかしいという感情が真っ先に来るのは、やっぱり色んなことが一気に起こったせいで気持ちが変わっているのかもしれない。時計を拾い上げるや否や深く抱きしめられる。タバコの匂いに混ざったウッディの香りに、鼓動がうるさく高鳴った。

「榊原、さん……?」

「……明日きつく叱っておきます」

地を這うような低音に、足がすくんだ。うなじに指が這って、さりげなく頭の位置を固定される。簡単に振り解けそうな力加減でありながら、包み込

むようにして抱かれていては身動きもとれない。胸に抱いた時計が最後の隔たりとなつてはいるけど、大きく跳ねる心臓の音が彼に聞こえていてもおかしくはなかった。

「——白石さん」

耳たぶに熱く滾った吐息が吹きかかる。それが何を意味するのかが分からないほど、世間知らずではなかった。

「え、あ、……ッ！」

軽々と抱き上げられて目を見張つてすぐ、唇が重なった。ちゅ、ちゅ、と音を立ててキスをしながら大して広くない我が家の中を長い足が闊歩し、あつという間に寝室へと辿り着く。

そのままベッドに押し倒されて、今度はもつと深くキスされる。強引に齒列を割って舌が振じ込まれて、喉がかすかに震えた。

「んん……っ、ふ、……ッ」

大きな身体に真上からのしかかれて、身動きがとれない。少しの自由も許さないとでも言うように頬を片手で拘束される。厚い舌が好き勝手に唞内を舐って、舌を搦めとった。ぢゅ、ぐぢゅ……♡ 響く水音が恥ずかしい。首の裏がゾクゾクと震えて、下半身から力が抜けていく。

「は……、っんう……ッう♡ あ、う……っ」

「こら、目を閉じないで。誰に買われて、誰のものになったのか。ちゃんと見ていなくちゃ駄目でしょう？」

「そんな……っあ、待って……」

「待ちません。あなたはもう、俺のものなんですから。俺がいいと言うまでは言うことを聞き続けてもらいます」

乾いた大きな手が、脚を撫でながらスカートを捲り上げていく。外腿からするりと内腿へと移動して、下着と肌の境目をしつつこく撫でる手に、嫌でも意識が向いてしまう。頬を固定する手はそのままに、視線を外すことさえも許されない。

——ッあ、あ……やだ……っ。撫でられてるだけなのに、見られてると思うと……っ変な気分になってきちゃ、う……♡ 腰がぞわぞわしてじっとしてられない……、もういつそ早く触って欲しい……っ♡

レンズ越しに見る目はどこか愉しげで、わたしの心の中まで見透かされる気がする。指先が下着の上を滑って、おまんこの窪みに沈んだ。

「んうっ♡」

「昨日も一昨日も……三時間程度しか眠れていないんです。今夜はもう少し眠りたい。期待してるんですよ？ あなたに」

「あっ♡ あ、あ♡ じゃあ、なんでわたし、に……っ♡」

「わたしに、の意味が分かりかねますが……仕置きでも舐めでもないのに痛い思いをさせるのは本意ではない。痛みや恐怖の使い所は弁えないと。それに」

かりかり……♡

下着の上からクリトリスを引っ搔かれて、甘い期待が広がっていく。すりすり♡ と撫で回されると、もっとして欲しくて腰が浮きそうになる。目尻に落ちた宥めるキスが優しく、泣きたくなった。

「俺は、俺が思ったように相手が動くところを見るのが何より好きなんです。今は指一本で感じるあなたを見るのが楽しい。ここ触るのが好きですね。クリトリスがもう硬くなってる……もっとして欲しい？」



「ひ、……っん、あ♡ う、う……ッ♡」

「気分よく射精して、程々に眠れるように俺を満足させてください。それがあなたの役目で、あなたがここに居る理由なんですから」

作り上げられた温厚そうな声の中に切実で真摯な色を感じた。涙で霞みつつある視界に映った彼の目がどこか辛そうで、どくと心臓が鳴った。遅れてじわじわと幸福感にも似た安心感に包まれる。

——……いても、いいんだ。

もう生きている意味も、理由もないと思っていた。特別やりがいがあるわけでもなく誰にでもできる仕事、疎遠になっていった友人達、この世にはいない家族。自由な反面で誰にも必要とされていないことが寂しくて辛くて。身体の中が空っぽになっていたところを、榊原さんは瞬く間に満たしてくれた。

「分かりましたか？」

「あっ♡ あ、あ……っんう、う♡」

「返事は？」

「っあ♡ あっ♡ ッは、……っんう♡」

かりかり♡ ぐり♡ こすこす♡

返事を要求しておいて、全く答えさせる気がない。硬くなったクリトリスを何度も引っ搔いて、甘い圧迫感を与えながら撫で回す。足の間に熱が溶け出す感覚がして、下着が張り付いてくる。もどかしい刺激を追うのに夢中になっていると、クリトリスを、ぴん♡ と弾かれた。

「ッあ♡♡」

「返事。俺だけのものになって、俺を満足させる。……他の男には指一本触れさせない。誓えますね？」

膨らんだそれを指の腹で潰したまま、ゆさゆさ♡ 揺すられて、根本から快感が滲んでくる。

——っあ♡ ああ、っん♡ 焦った、い♡ お♡ 根元に響いて……っ♡ あ♡ あ♡ うそ♡ こんなのおかしいのに……っ♡ 榊原さんの役に立てるの、うれしくなっちゃう……♡

こめかみが熱い吐息で湿って、低い声が甘く響く。感覚も意思も、彼に操られているようだった。

「んあ、あ♡ はい♡ う、あ……♡ 誓いま、す……♡」  
「……よろしい。素直な人は好きですよ」

鼓膜を揺らす声にぞくりと背中が震えた。認められた嬉しさと官能が一緒に流れ込んできて、きゅんと下腹部の奥が締め付けられる。

長い指が下着を引き下げて、濡れたおまんこを大きな手の平が包んだ。

「ッ!?♡」

「少し触っただけでもう濡らして。さっきまで泣いていたのに……切り替えが早いのか、それとも快楽に弱いのか」

「あッ♡ ああ♡ それっ♡ それ、だめ……ッえ♡ お♡ ツあ♡ おまんこ、撫でるのやあ……ッ♡」

潤んだ窪みに中指がぴったりとハマって、ぬちゅぬちゅ♡ ぐぢゅ、くちゅ♡ クリトリスごと手の平でおまんこを撫でられる。乾いた手にぬるぬると愛液が広がって滑りが良くなって、時間を追うごとに気持ちよさが膨らむ。ッんうづ♡ あ♡ 恥ずかしい♡ 恥ずかしい……♡ 普段こんなじゃないのに……♡ つ♡ お♡ 榊原さんに触られると、頭痺れて♡ 気持ちよくなっちゃう……♡ 勝手に足開いて戻せな、い……♡♡♡

膝が外を向いて「もっと撫でてください♡」と強請ってしまう。恥ずかしいガニ股になると、榊原さんは、ふー……♡ と熱い息を吐いてわたしの頬を舐め上げた。

「ひ、ああ♡ あん♡ あう♡ お♡ お♡ お♡」

「可愛らしいですね。普段のあなたからは想像もできない声を上げて、ガニ股になって……俺の手に媚びている。おまんこよしよしされるの、そんなに好きですか？」

「んぐ♡ すき♡ すき♡ 違うの♡ なんか今日おかし、くて……っ♡  
お♡ 汚い声出ちゃ、ぐ♡ ごめんなしや……ッ♡ おっ♡ お♡」

「おかしい？ 俺に触られておかしくなってしまったんですか？ ……どうして？」

「んお♡♡ わかんない……っ♡ お♡ うれしい♡ うれしくなっちゃ、  
ったの……ッあ♡ あ♡」

ぬぢゅぬぢゅ♡ ぐちゅ♡ ぐぢゅぬぢゅ♡

間近に注がれる視線は灼けつき、肌が熱くなっていく。湿度のある声に答えようとするのに、ぬぢゅぬぢゅ♡ とクリトリスを前後に捏ねられて何も考えられない♡

ゝッ♡ 腰♡ 腰へこへこしちゃ♡ クリ♡ もっとして欲しい♡  
きもち♡

シートを握りしめて、腰をへこへこ♡ 揺らして硬い指に擦り付ける。びりびりと走る刺激がたまらなくて思わず目を閉じた。

「ッあぁ！♡」

「目は閉じない。誰にイカされるのか、誰に触られて嬉しいのか、ちゃんと見て。ほら、クリトリスしこしこされるの気持ちいいですよ？ 誰にも聞かせられない声で啼いて、媚びて……俺にだけ見せてください」

きゅっ♡ とクリトリスを捕まえて、そのまま、ちゅこちゅこ♡ 扱かれる。

強すぎる刺激に大きく目を見張ると、榊原さんは目尻にキスをしてくれた。  
こんな恥ずかしいことしちゃっても全部許してもらえるの……♡ すごい♡  
もったきもちよくなる……♡ クリトリスしこしこ♡ しゅごい♡ きもちい♡  
全部預けて、ただきもちよくなっちゃう♡ お♡ お♡ あたま空っぽになる……っ♡♡

「ッほお♡ お♡ お♡ おんッ♡ いく♡ いきゅ♡」  
「ああ……だらしな顔をして。夢中で腰へこして、可愛い。クリトリス扱かれてイクんですね。誰にイカされるんですか？」  
「んえ♡ へっあ、あ♡ さかきばらさん♡ 榊原さんの、指でっ♡ イかせてもらう、のっ♡ んお♡ おっ♡ お♡ いく♡ い、うう♡♡」

「…………零一、と呼んでイッてください」

色気たっぷりの声が耳元で「小春さん」と熱っぽく囁いた瞬間、視界がパチッ♡と弾けてアクメを決めた♡

「れえ、いちさん……ッ♡ あ、お♡ いくいく♡ ヅづ、ん——ッ♡」

腰を突き上げた瞬間、ぶしゅッ♡ ぶしゅッ♡ 潮吹きまでしてしまった♡

「よくできました。小春さんは偉いですね、指示していないのに潮まで吹けて。まるで射精みたいだ」

「んおお……♡ あ、あ♡ ごめんなしや……ッあ♡ あ♡ なでなで♡ クリトリス♡ びりびりす、る……♡」



ぼってりと膨らんだクリトリスを潮でびしゃびしゃに濡れた指で撫で回されて、快感を逃がそうとまだゆるゆると動く腰が止められない。

は♡ ツは、ああ♡ ずっときもちい……♡ 名前呼んでもらえるのうれしい♡ なんかもう、榊原さんがすること全部きもちい……♡

どうしてかなんて分からない。自分に役割と居場所をくれたからなのか、極度の緊張と恐怖を浴びた直後で頭がおかしくなっているのか。

分かんないけど……もうなんでもいい……♡ きもちいと、辛い全部どっかいっちゃう……♡

「……物欲しそうな顔ですね。クリトリス……いえ、クリちんぽ抜きだけでは足りませんでしたか？」

「んあ……♡ ん♡ クリちんぽ……」

「ええ。そうでしょう？ 男みたいに扱かれて気持ちよくなって、挙げ句の

果てには潮まで吹いてしまうんですから。……ああ、それとも」

くるくるとクリトリスを撫でていた指が滑って、ぬぢゅ……♡ おまんこに沈んだ。

あ、あ♡ 指、入ってきた……あ♡ お♡ 久しぶり、だから……一本でも、苦し……♡

ぬぢ、ぬぢ……♡ 狭いそこを広げるようにしてどんどん奥に入ってくる。探られるたびに圧迫感を感じるけど、じんわりと滲む違和感と快感に息が震えた。

「指を入れただけで顔をとろとろにして……やっぱりナカにも欲しかったんですね」

「あっ♡ あ♡ あ、あん♡ ん、んぐ……ッ♡」

「かなり狭いですね。自分では触らないんですか？」

「んっ♡ んん……ッ触らない、です……っあ♡ お♡ そこ……っ♡ ぞわぞわす、る……♡ ッ♡」

ぐり……♡ とん♡ とん♡ とちゅ♡ とちゅ♡

お腹の裏側を絶妙な加減でとんとん♡ されると、じわあ♡ と快感が滲んで背骨が震える。勃ったままのクリトリス——クリちんぽに響いて、腰が落ち着かない。

内側から優しく叩かれるたびに、ひく♡ ひく♡ クリちんぽがひくついているのが分かる。

「熱いマン肉がねっとり絡みついてきて、離してくれません。こっちも一緒に触ったらどうなるんでしょうね？」

「あっ♡ あ、ああ……♡ そんな、の……♡」

親指が思わせぶりに掠めて、びくんと腰が跳ねた。おまんこはきゅんきゅん締まって、期待しているのが丸分かり。くすりと笑う気配がした直後、ぐりゅん♡ クリトリスを潰された♡

「おッ♡♡♡ ツうううううっ♡ あ♡ ツああ♡♡♡ んお♡ おおッ♡  
ほお♡ おお——…ッ♡」

ぐにぐに♡ ぬぢゅ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡ ずぢゅ♡

おまんこのイイところを押し上げながら、クリちんぽをぐりぐり♡ 甘く潰される。強すぎる刺激に頭がのけ反って、浮いた腰を突っ張らせることしかできない♡

——ッあ♡ あ♡ しゅごい♡ あたま♡ ばちばちするっ♡ いく♡  
い、ぐ♡ クリちんぽとおまんこ♡ いっしょにいく♡♡

「腰、すごい跳ねてますね。まんこ差し出して、オホ声上げて……いつもの可愛らしい小春さんはどこに行ったんです？」

「んああ♡ ごめ、っごめんなし♡ いくいくい、く♡ おまんこイキます……ッ♡ れいいちさん♡ いぐ、うう……ッ♡」

「……ッ♡ ああ、もう。本当にあなたは……。いいですよ、もう一回おまんこ射精してイキましようね」

レンズ越しに見える目がギラギラと鈍く光って、わたしを捉えて離さない。言いつけ通りにイク瞬間に目を閉じてしまわないように歯を食いしばって、腰を無様にへこへこ♡ 揺らして快楽を追って——見せつけるように潮吹きアクメを決めた♡

「んぐッ♡ おっ♡ ほ、オ♡ あ♡ あ、んん……ッ♡ は♡ はえ♡ あ、え♡♡♡」

ぷしゅッ♡　ぷしゃ♡　小刻みに潮が吹き出るたびにおまんこに甘やかな快感と開放感が広がっていく。

誰にも見せたことのない恥ずかしいガニ股開きのまま零一さんの指を咥えて、その手を汚す背徳感がたまらない。未知の快感に心まで深く犯されていく……♡

「上手にイけましたね。まだヒクヒクしてる……随分柔らかくなって……」  
「はぁ……♡　あ♡　んあ、あ……♡」

ぬぽ……♡　多量の蜜を纏った指が引き抜かれて、腰がベッドに沈んだ。力が抜けて、膝ががくがく震えている。さっきまで抱えていた孤独感や絶望感は、もうこれっぽっちも残っていないかった。

あたまが……しゅわしゅわして……♡　溶けそう……♡　あ♡　あ♡　気

持ちよくて、涙出ちゃって、る……♡

瞬きをした時、涙が頬を伝った。零さんの指が顎の下をなぞって、視線が絡んだ。凄まじい色気を纏った陶然とした笑みにドキドキする。

「……これで上書きできましたね」

「上書き……？」

「ええ。俺と会う前に泣いていたでしょう？ 涙の跡が残っていました」

両足を抱えて広げられて、とろとろになったおまんこが晒される。空気が触れるだけで感じてしまうそこに、むっちりとした熱の塊が乗った。

「んあッ♡ あ、あん♡ ぐ♡ んお♡ おお♡ クリちんぽ、潰れ……っ♡

「俺以外に泣かされたなんて許さない。……ああ、もちろん笑うことも本当

は許したくないんですが……」

ぐりゅん♡　ぐにぐに♡　ずり♡　ずり♡

「おッ♡　お♡　あっいの♡　おちんぼ♡　本物ちんぽおっきい♡　あっ♡  
あ、っあ♡　ずりずり♡　きもち……い♡」

「この顔を独占できるので、まあ良しとしましょう。可愛くてすけべな顔も、  
声も……全部俺のものです。分かってますね？」

にっぢゅにっぢゅ♡　ぐちゅ♡　ずぢゅずぢゅ♡

正常位でおちんぽがクリトリスを捏ね潰す。吹いた潮もおまんこ汁も絡めて、  
えっちな音を立てて何度も何度も。

んあ♡　あ♡　おちんぽすごい♡　ごっごっして♡　んお♡　カリがクリ  
ちんぽに引っかかって……っ♡　お♡　強い♡　おまんこ潰されるの♡　き



もちいい♡♡

「んぐ♡ ん♡ んッ♡ んお♡ お♡」

大きな身体が真上から覆い被さってきて身動きが取れない♡

隙間なく唇が重なって、口の中いっぱい舌が振じ込まれる。眼鏡のフレームが当たると意識が彼に向いて、今自分が誰に抱かれているのかを実感せざるを得ない。

ぬぢゅぬぢゅ♡ 上からも下からも響く粘着質な音に興奮が煽られて、全身で零一さんに抱きついた。

「……………ッは……………」

「は、あ♡ あっ♡ んん……………ッ♡ んお♡ お♡ ぐ♡ ツ♡」

~~~~ッ♡ 声も息も♡ 全部食べられて♡ クリちんぽ♡ どちゅどちゅ♡ きもちいい♡ んお♡ お♡ い、く♡  
入っていないのに、のし掛かる圧迫感と重みで繋がっているように錯覚する。おちんぽが硬くなって、顔に「ふ♡ ふ♡」と乱れた息が掛かる。両足でぎゅっ♡ と深く抱きついて自分からも腰を、ゆさゆさ♡ して絶頂に近づいていく……♡

「ッは♡ あお♡ んお♡ お♡ ッお♡ いく♡ おまんこ♡ 潰されていく♡ れえいちさんの♡ おちんぽで♡ い、ぐ♡」  
「いいですよ……、ッこのまま、イキ顔見せて……ッ」

流れる涙を舐め上げて、どちゅどちゅ♡ 射精間近のおちんぽで責め立てる零一さんを見上げた。乱れた前髪も上がった息も全てが色っぽい。

「んッあ、ああ……ッ い、きゅ♡ んぐうう……ッ♡♡」

同時に、ぶびゆるるッ♡ びゆるるるッ♡ 勢いよく弾けた熱が掛かって、イキたてのおまんこをさらに追い立てた♡

首筋に噛み付かれて、鈍い痛みが走った。噛まれたところがジンジンする。飛びかける意識が最後に捉えたのは、ぎらつく獣の目でわたしを射抜く零一さんの満足そうな声だった。

「これから毎晩、よろしく願いますね。俺の、小春さん」



現実離れた出来事が立て続けに起こったあの日から、もう二週間が経と

うとしている。

——借金とか風俗とか、全部夢だったみたい。会社も周りも、本当に何も変わらない。元々夜はほとんど家にいたし……。

変わったことと言えば毎晩20時ぴったりに零一さんが家に来ることと、スマホにGPSアプリが入ったことくらい。

「危険がないように」と言われるままにインストールしたアプリは、見えない首輪だ。息苦しいように見えて、その実持ち主と繋がっている安心感が全て。

——依存、してるのかも。分かんない。でも、零一さんこうなる前と比べたら毎日もっと頑張れてる気がする。

たとえそれが金で買われた関係だとしても、役割があることが嬉しかった。必要とされることが嬉しくて、できるだけ彼に気に入られたいと思うし、役に立ちたいと強く思う。

明け方にこっそりと見る彼の寝顔は何よりのご褒美だった。自分が零一さ

んの役に立てていると実感できるから。

……もう来るかな。まだかな。

ぴんぽん、と安っぽいベルが鳴って、弾かれたように立ち上がった。零一さんは合鍵を持っているのに、毎回律儀にインターフォンを鳴らす。

「はあい！」

自分の存在をアピールしながら玄関のドアを開ける。飼い主の帰宅を待ち詫びる犬と何も変わらない。

涼しげな佇まいでそこにいる零一さんを見た瞬間、自分の顔に笑みが広がるのを感じた。

「おかえりなさい」

「ただいま、小春さん。いい子にしましたか？」

零一さんは部屋に入ると、白くて小さなケーキの箱をくれた。隣駅にあるタルトが人気のパティスリーのロゴが控えめに印字してある。

「帰りに通ったので。好きですよね？ いちごのタルト」  
「！ 大好きです」

知ってます、とても言いそうな顔に胸が甘く高鳴る。

なぜだか彼には自分の趣味嗜好が筒抜けで、教えた記憶がないことまで把握されている。たとえば学生時代の部活のこととか、お気に入りのカフェまで。全部お見通しなのだ。一体どうやって知っているんだろう？

二人がけのソファに腰を落ち着けたのを横目に、お皿にタルトを盛り付ける。コーヒーを淹れながら見えたネクタイを緩める仕草に勝手に盛り上がる。

「……どうしました？」

「い、いえ……なんでもないです」

「俺はコーヒーだけいただきます。甘いものは苦手です。二つとも小春さんがどうぞ」

赤いマグカップを手にする姿がなんだかおかしい。

零一さんにはもっと……高価なカップとコーヒーが似合うと思うのに。

……ちよつと可愛い、とか。思ったりして。

安いインスタントを飲む仕草さえ美しい。どこを切り取ってもドラマや映画の、もしくは少女漫画のワンシーンみたい。隣に座る彼をチラチラと見ながら大粒の苺を頬張った。クリームが付いた甘酸っぱい果実に自然と顔が綻ぶ。

「おや、小春さん」

「なんですか？」

頬に手が触れて、ちゅ、と音を立てて唇の端にキスが落ちた。

「——甘いですね」

眉間に皺を刻んで呟く声は不快そうで、本当に甘いものが苦手なことが察せられた。

——言ってくれば自分で取ったのに、どうして……いちいち、触れて……っ

付いたクリームを拭うのにキスする必要なんてない。こんな恋人に触れてくても仕方がない人のような素振りは心臓に悪い。

くっ、なんでそんな顔で見るの……！

じっと注がれる視線がいやに甘い。胸に込み上げる何かを持て余している



ような、そんな目。

じわじわと顔が熱くなるのを感じながら視線を伏せると、添えられたままの親指が意味深に動いた。

「食べないんですか？」

「食べ……ます、けど……」

「けど？」

「あ……っ、あ、いじわ、る……っ」

お皿を持ったままのわたしになんてお構いなし。悪戯な手は首を撫でて、部屋着の上から胸を包んだ。ふにふにと弄んで、指先が中心のあたりを意味ありげに行き来する。

期待に疼いた乳首は瞬く間に膨らんで、かり♡と引っ搔かれた瞬間、びくりと肩が跳ねた。

「意地悪なんてしてませんよ。ただ可愛がっているだけで」

「っう♡ あ、あ♡ほんとに、だめ……っ♡ 落としちゃ、う……♡」

「それはいけませんね。こぼさないでください。高いクリーニング代なんて払いたくないでしょう？ ほら、頑張って」

「や、ああ……♡ 払え、ない……♡ んっ♡ ん、う……っ♡」

せっかく零一さんが買ってきてくれたものを台無しにしたくはない。何より食べ物で粗末にするなんて考えられない。

テーブルに置きたい、のに……っ♡ あ♡ 乳首、きもち……♡ あ♡

だめ♡ 服の上からカリカリするの……♡ 一番好き……♡

両手でお皿とフォークを持って震えるわたしに、愉悦が隠しきれない眼差しが向く。長い指がしっこく、カリカリ……♡ すりすり♡ 乳首を刺激してくる。

「ちゃんと下着を着けずに待っていたんですね。期待しました？」

「あ♡　だ、って……っ♡　それが、わたしの……役目、っ♡　だから……っあ♡」

「……そうですね。小春さんは俺のもの、ですから。今夜もよろしくお願いしますね？　このところちゃんと眠れるので、調子がいいんです」

一瞬暗くなった瞳が、また悦を見出してわたしを見つめる。薄い部屋着を押し上げる乳首を、きゅ♡　と甘く抓られて喉の奥から細い悲鳴が震えた。

「あ、っあ♡　零一さ、ん……っ♡　も、う……っ♡」

「もう？　なんですか？」

息も絶え絶えに顎を引く。躰けられた身体はもう限界だった。

「……ケーキを冷蔵庫にしまって、戻っておいで。できますね？」

部屋に響く低い声が脳に染み込んで抗えない。馬鹿みたいに素直に頷いて、わたしはキッチンに急いだ。

♡  
♡  
♡

「あっ♡ あん♡ んう、ぐ♡ っう♡」

「ほら、頑張つて。まんこ締めて我慢しないと……小春さんのせいで汚れてしまいますよ？」

明るい部屋の狭い二人がけのソファ。その中央にどっかりと座る零一さんの膝の上に、全裸で跨っている。

両手は彼のネクタイによって腰の上あたりで縛られていて、自分からは何をすることもできない。ぷっくりと膨らんだ乳首を指と舌で舐られて、腰が揺れるのを懸命に我慢していた。

「は♡ あ♡ あ、あ♡ 乳首、きもち……♡ おまんこ、我慢できな……♡ んっ♡ んぐ♡」  
「いいんですか？ ほら、ちゃんと腰を浮かせないとスーツが汚れますよ」  
「んぐうッ♡ お♡ お♡ 吸っちゃ、らめ……えっ♡」

ぢゅう♡ ぢゅッ♡ れりゅ♡ すりすり♡

勃った乳首の片方は指で擦られて、もう片方は熱い咥内で捏ねられる。絶頂には届かない加減でそうされて、下腹部の奥がきゅんきゅん♡ 疼いて仕方ない。でも、きっちりと着こなした高級スーツを汚すことはしたくない。

くっ♡ お♡ だめ♡ だ、め♡ 腰へこへこしちゃだめ……っ♡ お

まんこ汁飛んじゃう♡ あ♡ あ♡ 我慢つらい……っ♡

「……ふ。辛そうですね。そんなに辛いのに、俺の言うことは聞くんですか」  
「ひっあ、あ♡ あ♡ んっ♡ だって……っ♡ 零一さんの……言うことは、っ♡ 全部聞きたい……っか、ら……♡ あっ♡ ん、んん♡」

溶けそうになっている思考で告げる言葉に嘘はひとつもない。

自分を必要としてくれる唯一の彼の言いつけはわたしにとって絶対で、何よりも守りたいもの。

胸だけでなく下半身にまで届く快感に、向けられる眼差しに支配されるのが何よりも心地いい。大きな手がお臍の下を撫でて、それからおまんこの溝を舐めるようになぞり上げた。

「あッ♡ ああ♡ んう、う♡ ふう……ぐッ♡」

「可愛い。こんなつもりじゃなかったのに……これは嬉しい誤算と言うべきか、迷いますね」

「はー……っ♡ はッ♡ あ♡ ああ♡ 誤算……？っ♡」

「ええ。これではいつまでも手元に置いておきたくなる」

ぬちゅぬちゅ♡ くに♡ れりゅ、ぢゅ、ぢゅ♡

潤んだおまんことクリトリスを指で撫でながら、乳首を遊ぶ。ソファに付いた膝に力を入れてなんとか耐えているけど、もっと強い刺激が欲しくておかしくなりそう。けれど、聞こえた不穏な……別れを仄めかす言葉に顔が歪む。

そんな、やだ……っ、置いていかれるの、やだ……っ  
快感と見捨てられる不安でぐちゃぐちゃになる。

「んっ……や、あ♡ いや……っ、ずっと使って……っ♡」

「またそんなことを言つて。俺がカタギの人間じゃないこと忘れましたか？」  
「あッ♡ あ♡ 忘れ……っ♡ ない……っ♡ あッ♡ あっ♡」

抱きついて縋りたいのに、両手は縛られていて自由がない。なめらかな感触の布が淡く食い込むばかり。

腰が落ちかけてクリトリスに深く指が食い込む。痺れるほどの快感に、こんな時も情けなく声が濁った。腰が、ぐっと前に出て蜜が滴った。

「おっ♡ お♡」

「……ああ、ほら。これはお仕置きですね」

スーツの股座の部分に飛んでしまったらしい。愉悦を存分に孕んだ声がそう告げて、支配される悦びに身体が内側からゾクゾクと震えた。

——……っ♡ お仕置きされちゃ、う……♡ すごい、くる……♡